

共同研究 古代文学存疑

家持の母は誰か

大伴旅人の妻は大伴郎女である。そして彼女は夫の大宰帥時代にかの地で歿し、大宰府の背後に聳える大野山のどこかに葬られた。旅人は家持の父であるに相違ないが、生母は果して大伴郎女であつたらうか。

天平十九年二月二十日、越中守家持は「枉疾に沈み、殆に泉路に臨」んで「悲緒を申ぶる一首」を作つたがその中に、
 3962 宇都世美能。代人奈礼婆。字知奈麻吉。
 等許爾許伊布之。伊多家苦之。日異益。多
 良由久良爾。思多具非爾。伊都可聞許武等。
 良知爾乃。波ハ能美許等乃。大船乃、由久
 麻多須良牟。情左夫之苦。波之吉与志。都
 麻能美許登母。安気久礼婆。門爾餘里多知。
 己呂母泥乎。遠理加敵之都追。……

この歌によれば天平十九年二月二十日には家持には妻大伴坂上大嬢とともに「たらちねの母の命」が奈良に現存したのである。旅人の妻か、それとも妻の母大伴坂上郎女を指すのか。
 (市村 宏)

自然詠の系譜を

庭の梅が咲きはころび、やがてはだれ雪のように散つてゆく。沈丁花の季節が終れば、桃の花が咲き出す。ああ、美しいと思う瞬間、万葉集の古歌のいくつかが頭に浮ぶ。それはど、一九六四年のオリンピック・イヤールの現実とある種の歌とは類似しているのだ。千二百年の歴史の流れに、かつての青垣山變じて歎楽境になつたかも知れぬ。それでもなおかつ、ある系譜を偲ぶことができるのである。わたくししさやかな研究は万葉集での異色ある巻であり、それに連なる一連の民謡である。その中に流れる心情を辿つてゆくうちに、現代との一貫性をも感ずる。それと同様に自然詠の系譜をたどつてゆく中に、時代により観照態度は異つても、何かが把握できさうな気がする。

古典は現代と断絶しているものではない。現代は古典の系譜の上に立っているものだけ。例えば思考力さえも——ということを立てた。これが古代文学を愛する高校教師わたくし。

しの悲願である。

(江野沢淑子)

朝川渡る

人言を繁み言痛み己が世に未だ渡らぬ朝川渡る(万葉集一一六・但馬皇女)

異母兄弟の穂積皇子と接したことが知れて作つた歌だという。ここでは「朝川渡る」が問題である。近代の註釈の帰結としては、皇女の恋情の深さを表現したのだという説明に落付いているらしい。それならば、「朝川渡る」は難事の象徴に過ぎないというのであらうか。アント・ランダムな行爲だというのだろうか。

恋情の実践に川渡りを習慣としたらしいことは、長皇子の一三〇の歌、紀女郎の六四三の作などからも窺える。話は飛ぶが、古代エジプト中王朝の頃には、罎の棲むナイルを泳ぎ渡つて恋人と逢う女性が、その恋の深さの故に讃歎された。それは母権社会の女がもつていた積極性であつた。皇女の「朝川渡り」も同様な心情を根底に秘めた慣習ではなかつたか。朝川というのも吉野宮從駕の三六の作のように夕川との対照で使用されたのでないことも判っている。それに浅川の意でもなからう。中世末期頃の宗安小歌集に見える「十七八はあさ川渡る。わが妻ならうにや負い越

やそ。」を初めに据えた連語は、情事への期待を内にひそめた民謡である。この場合の「あさ川」も、この歌謡の中だけでは割り切れない素材である。民俗としての「朝川渡り」の意味は、さらに追求されるべきであろう。

(大久間喜一郎)

靈異記の作者景戒は帰化人か

靈異記の作者景戒は帰化人系で河内國の出身であるという仮説には有力な根拠が指摘できる。これまでに出示された一般説は景戒の夢想を重要視し、紀伊国名草郡部内楠見村の沙弥鏡日の関係から当地を景戒の出身地としたが、それが説話集を研究するための何ら手助けとなっていない。百十六話の説話の持つ性格は、その大半が苦境から祈る幸福の獲得である。高利貸などの経済観念が発達し、建築工芸に優れた技術を見せ医学に詳しく話は大陸からの伝播であることは当然で、それら説話の保持者も帰化人系が多く、玄井三蔵↓道昭↓行基↓景戒の師弟関係も道昭、行基を帰化人と証明できるし行基への心酔者景戒も思想の上でこの一線に堅くつながっている。また説話の全体の性格から考えて、大ざっぱにいつて成立年代の近い伊勢、大和の説話とは全然異質のものである。ということは編纂者

のもつ極素朴な世界観の相違であり、それは帰化人と日本民族との相違に帰結しよう。

(大谷 義博)

白木綿花

白木綿花は白木綿の造花であるとすると説が一般的であるが、(一)文証がない。(二)木綿の造花のようなものが泊瀬地方あたりの特産であったらう(万葉集事典)というが、その地方の婦人たちの手内職となるほどの需要があったとも思われない。(三)神事や儀式などにこれを用いるのなら、そのような面倒なものを用意するまでもなく、周囲にみられる「時の花」の方がはるかに新鮮で実用的で、当時においてはその端みに私見をいえば、白木綿を花の盛栄によそえて白木綿花と云ったのではあるまいか。古今集巻十に「けづり花」の語のあるのも参考になる。そうすれば、木綿花を造るという語は、結局、木綿そのものを造る意になる。木綿を造るといふ云い方なら、神代紀一書、豊後風土記、神楽歌にも見える。それに私は、木綿花はすべて水辺に関連して歌われるところに意味があり、この点に注目することがこの語の真義を考えるかぎではなからうかと思うのであるが、いなかであろうか。

万葉植物「児手柏」と正倉院薬物帳

(尾崎 暢殊)

万葉集に見える植物は一六〇種に及び、植物の出る歌は一五四八首で総歌数の約三分の一に達する。その大半が古代人の衣食住に直結した植物であり、特に薬用植物は六三種で三八%を占めてゐる。併しその植物の中には未詳のものや対応和名に説の岐れるものもあり、解釈上究明の要がある。

さて万葉集には「このてがしは」を詠みこんだ歌が二首あり、児手柏（巻十六・三八三六）、右乃且之波（巻二十・四三八七）であるが、その植物の実態に就いては未だ定説を見ない。私は古来の諸説を批判して、児手柏は貝原益軒の「大和本草」等に見える側柏で而も漢方医薬として舶載した柏子仁の地に落ちたもので、帰化人などが觀賞用として植栽したものであらうと論断した。（昭和三十七年六月）曾て植物学者の白井光太郎博士等が側柏は近世（元文年間）の渡米で万葉に合はないと説かれてから爾後概ねこれに従ふ。併し側柏の種子柏子仁は漢方薬として既に平安朝初期に渡来してゐた事が深根輔仁の「本草和名」の記事に依つて知られるので、更に遡つて韓医方や唐医方が盛行してゐた上代に舶載されてゐた可能

性が大である。さて「正倉院薬物一覽」(寺獻)に約六十種の漢方薬品が記されてゐるが、柏子仁は見当らない。併し「帳外薬物」として記載されてゐない薬物約二十種が現存し由来も種類も不詳の由であり、或はその中に側柏の実が千年の風雪に耐へてひそんでゐるのではなからうか。果して然らば漢方薬として渡来した柏子仁が地に落ち或は植栽されて、奈良山(三八三六)や千葉の野(四三八七)に生育した事は、作者と生活圏から見て想像に難くない。万葉の両歌の醫驗もしくは序詞としての表現は漢方薬ゆかりの生活体験に基づく景観描写であらうと思ふが如何。

(長田 貞雄)

理想的「古代」

「源氏物語」と、その時代が、その後々の時代から、理想的な時代相としてふりかえられ、理想的な美的表現のモデルとして、常に多く見つめられてゐる。これと略々相似の形で、古代伝承の語り手や、古代文学の筆録者たちは、雄略天皇代を見、更に遡って、仁徳天皇代を見つめて、一層古い理想的な時代とし、表わし伝えてゐる。

古代伝承・古代文学における、このような古代仰望の思惟は、特に、神社創成縁起譚に

おいては、更に、古代へ遡っている。

伊勢皇大神宮・石上神宮の始源が垂仁天皇代と伝承され、広瀬社・竜田社のそれは、崇神天皇代とされているなど。しかし、これらが殆どすべて、天武代における、古代統一国家形成への、思想的政治の処置として積極的になされたものであることを、今日の古代史学・古代文学研究は実証提示して来ている。この崇神・垂仁代が、かく、「重く」ふりかえられる時代の意義、または、その思惟基底を、更に、明確にするものは、何か、「古代文学存疑」の一つとして。

(賀古 明)

仁敬(教)は人の名か

万葉集に「唾咲瘦人歌二首」というのがある。その左註に「所謂仁敬(教)之子也」とあり、昔から、この仁敬(教)が、「字」なのか、仁敬(教)のある者なのか疑問とされて来た。もしもこれが「字」だとしても、その正しい名前はわからないだろう。前に私はこれについてしらべた時、諸橋博士の『大漢和辞典』に、「仁敬」という語のあるのを見つけた。この時、仁敬(教)はやっぱり人名だったのだと思つた。説明文をみると「廖復之」の「字」だという。しかしそのあとの説

明をみて、あきらかに別人である事を知つた。それ以来、人名なのか、そうでないのかまよつていたが、最近どうも、これは人名ではないらしいと思つた。それは漢文の常識から言つて、人の名前の上には「所謂」の如き語が来ないからである。「佩文韻府」他いろいろみたが、その例がなかったら、また「古事記」以下にも、やはり見あたらない。「仁敬(教)」は人の名ではないだろうと思う。(清水 一茂)

殊儻と田儻

日本書記天智天皇の条に「田儻」の語があり、これについては、田の耕作から収穫までのさまを模擬的に演じる田遊びと関係があるという議論がある。一方、顕宗紀における新室寿吉の場面の「殊儻」には「殊儻、古へこれを立出儻と謂ひ、立出、これを陀豆と云ふ。儻ふ状は起ちつ居つて儻ふなり」との注があつて、前記の「田儻」とは関連がないかのように考えられているが、播磨風土記の同じ室寿吉の伝承には、

たらちし 吉備の鉄の 狭帯持ち 田打つ
如す 手打て子等 吾は儻ひせむ

の歌謡があつて、顕宗紀の室寿吉の寿詞、(略)牡鹿の角挙げて吾が儻へば(略)手

掌も摺亮に拍ち上げ賜はね吾が常世等と対応している。この対応からは、鹿の扮装による舞を含む田遊びが上代に行なわれたことが想像される。田遊びが他の要素を併せて宮廷に入り、高尚化したのが田舞だとする議論からは、これは、まだ宮廷に入る前の田遊びの姿がある程度伝えられていると言えるだろうか。

(田中 貞三)

靈異記の説話

靈異記の説話の一条一条は、当時のあますることなき世相の鏡である。ほんの一例をとりあげてみても、たとえば、登場する盗みの数々は、律令体制のゆきつまりと世情の頹廢を反映しつづけている。仏像を盗み銭につくりなし、経巻を盗んで売り歩く。そのみならず、横領・強盗・強奪ごときも憚らない。だから、このような乱世では、実母に貸した稲を責め徴り、飯を乞う母に食を惜しみ与えぬばかりか、貸した稲や綿は不正にとりため、他人の妻を犯し、己の欲する目的のためには母を殺すことも厭わぬといった具合である。こうした、作品に反映した汚穢・醜態・悪行等の万遍ない世情の実態は、かなり、続日本紀等から実証し得ることである。

しかし、従来、靈異記が仏典の中に多くの

教誡の弁を借り、説話構成の上の範を垂れていること、そして事実、仏典の中に、多く共通する話や素材の酷似する例が見出せることから、靈異記を仏典の翻案であるかのごとく考える傾向が強かった。しかし、この点は、仏典との比較と説話構成等を分析して、更に深く究明されることによって、もはや、解決されるものと思う。

(露木 悟義)

民謡と短歌形式

幼稚な疑問であるかも知れないが、なんとなく気になるのは、東歌など民謡といわれている短歌形式の歌が、実際に今日みる語句のまゝでうたわれていたのであるかということである。もともと、常陸風土記所載の歌垣での歌がほぼ短歌形式であり、「詠ふ歌甚多くして、云々」とあるところからみると、東歌もそのまゝ、うたわれていたらしくも考えられる。しかし、うたわれていたらしくも味気ない。実際にうたわれていた時には、五七五七七のはかに語句の繰返しや囃詞があったのではないだろうか。例えば、催馬楽にみられるように。そのような繰返しや囃詞は省略され、あるいは全体的に集約されて、短歌形式の東歌が誕生したのではないか。繰返しや囃詞(共感やひやかしや笑いなどの意味をも

つ)を伴わない民謡(東歌)は、どうみても何が足りないように思われてならない。東歌を民謡として理解しようとするならば、当然、疑ってよいのではなからうか。(戸谷高明)

出雲八重垣

「八雲立つ出雲八重垣妻隠みに八重垣作るその八重垣を」の第二句に久しい存疑がある。最近では出雲を地名と解く説多く(武田祐吉博士全講及び古典全書日本書紀、石井庄司氏大成本文篇、相磯貞三博士全註解等)、地の文にひかれて雲の状とする説(宣長、太田善麿氏古典全書古事記)もある。しかし八重垣に承けられる地名は通常の地名の用い方とは異り、後者は寓話的すぎる。私は、出雲を比喩と見「八雲立ち湧く雲が重畳たる如く」重畳たる垣よ」という意と解する。比喩とする事は契沖と等しいが、契沖は「速ニ出来タルコトヲ雲ノ俄ニ興ルニヨセ」たとし、私見と異なる。この雲は「国溢り嶺に立つ雲」(万14三五一五)の如く生活的であり、「淡海路の鳥籠の山たる不知哉川」(万4四八七)と同じ修辞である。地の文は無論後の付会で、この室寿歌が神話に組入れられると、宣長らの解く如き享受をされたであろう。これは神詠の解釈である。(中西 進)